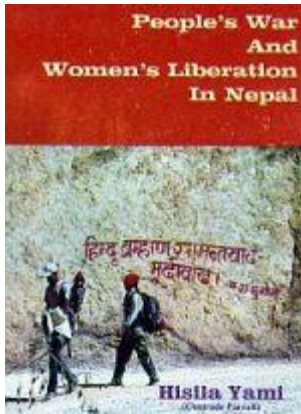


9月 2011 のアーカイブ

ヒシラ・ヤミは現代のクサンチッペか

首相夫人ヒシラ・ヤミが、散々酷評されている。マオイスト女性の鑑なのに。



ヒシラ・ヤミ著「人民戦争と女性解放」

夫のバブラム・バタライ首相は、国産ムスタン車を公用車として採用、庶民の拍手喝采を浴びた。首相はネルー大学博士であり、博識のインテリ。かつて碩学 J.S. ミルが「太った豚になるより、やせたソクラテスタレ」と諭したが、バタライ首相はまさしくその「やせたソクラテス」といってよいだろう。あるいは、少なくとも、そう見られたい、と思っているといっってよいだろう。

バブラム首相がソクラテスなら、その妻ヒシラ・ヤミは、当然、クサンチッペ、悪妻だ。夫が 160 万ルピーのムスタン車なのに、妻ヤミは豪華トヨタ・プラドを首相夫人車として要求したという。ネパールでの価格は 1500 万ルピー、ムスタン車の 10 倍だ。



ネパール国産ムスタン車



トヨタ・プラド

また、夫の権力を笠に着て、各省の役人を官邸に呼びつけ、私的な用事を命じているという。息のかかった団体への資金援助も要求しているらしい。まさしく悪妻、現代のクサンチッペとってよい。

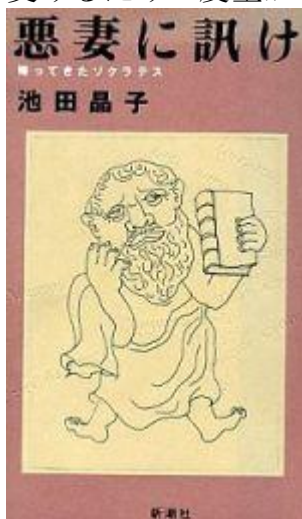
かつてソクラテスも、自分の妻さえ説得できないくせに、偉そうなことをいうな、とさんざん非難された。碩学バブラム博士は、当然、この故事を熟知しており、さっそく妻ヤミの説得に当たった。それが利いたのか、ヤミは要求を引き下げ、インド車ボレロにしたという。といっても、これも300万ルピー以上はする。やはり、ヤミは悪妻だ。



インド車ボレロ

しかし、たしかにそう見えはするが、本当に、そうだろうか？ ソクラテスは、クサンチッペがいたからこそ、「やせたソクラテス」たりえたのではないだろうか？ クサンチッペの常識が、ソクラテスの非常識を際立たせると同時に、非常識の自滅をかりうじて引き留めていたのではないのか？

もしそうだとすると、バブラム首相は、悪妻ヤミにより引き立てられ、生かされているともいえる。バブラム首相が「やせたソクラテス」たろうとすれば、ヤミはどうあっても「現代のクサンチッペ」たらざるをえない。夫のために、悪妻を引き受けるだけの度量がヒシラ・ヤミにはあるのだろうか？



* ekantipur, Sep.28-29.

谷川昌幸(C)

2011/09/29 20:56

カテゴリー: [マオイスト](#), [政治](#), [本](#)

タグ: [Bhattarai](#), [HIsila Yami](#), [Socrates](#)

国家世俗化とネパール・ムスリムのジレンマ

1. 報道自主規制の危険性

9月26日のイスラム協会書記長暗殺は、衝撃的な大事件であり、大きく報道されると思っていたら、ネパール・メディアの扱いはごく控え目、今日はもうほとんど見られない。事件が小さいからではなく、逆に、あまりにも大きく深刻だからこそ、自主規制しているのだ。

このような事件については、センセーショナルに報道しコミユナル対立を煽動するようなことは絶対に避けるべきだが、しかし、これほどの大事件を自主規制しほとんど報道しないのも、またきわめて危険である。青年リーダーを暗殺されたムスリム社会には怨念が鬱積し、いつかは必ず爆発するにちがいないからである。暗殺事件を冷静に分析・報道し、厳正な犯人捜査を要求する。それ以外に、解決への道はない。



Gunmen assassinate Muslim leader in Nepal

Religious violence is a potential challenge to social harmony

(islamonline,20110927)

詳しく報道するイスラム系メディア

2. ムスリム人口の増大

ネパールのムスリムは、パンチャヤット制の下での法典改正(1853年法典から 1963

年法典へ)により、いくつかの深刻な差別は残ったものの、基本的な市民権と信仰の自由を与えられた。そして、1990年民主化により政治参加が自由となり、2007年暫定憲法により国家世俗化も実現した。

こうした状況の下で、全人口に対するムスリム人口は、2%(1981)→3.5%(1991)と増加していき、現在では10%近くに達しているとされる。そして、その多くがバングラデッシュからタライへの移入であり、インド国境沿いには181のマドラサ、282のモスクが出来ているという。

ムスリムが実際には全人口の約10%を占めているとすると、これは大勢力だ。特にタライでは、バンケ、カピルバストゥ、パルサ、ラウタートの4郡でムスリムがすでに過半数を超え、バラ、マホタリ、ダヌサ、シラハ、スンサリの6郡では2番目に大きい社会集団となっているという。

もしこれが事実だとすると、国家の民主化・世俗化で、ムスリムは自分たちのアイデンティティを主張する権利と、その権利を通すだけの実力を身につけ始めたと言ってよいだろう。

3. ムスリムのジレンマ

しかし、これはムスリムに難しいジレンマを突きつけることにもなる。もしムスリムが自分たちのアイデンティティを前面に出し権利を主張すれば、多数派のヒンドゥーからの反発を招き、コミユナル紛争になる。10%になったとしても、圧倒的に少数派であり、コミユナル紛争の被害は計り知れない。正当な権利があるのに主張できない。これは深刻なジレンマである。

あるいは、マオイストが主張するように、もし連邦制となり州自治・民族自治が認められたら、すでに過半数を超しているとされるタライ諸郡のムスリムはいたいどうするつもりだろうか？自治権あるいは自決権を行使してムスリム州あるいはムスリム国とするのであろうか？しかし、もしそのようなことをしたら、大変なことになる。マオイストや他の主要諸政党が喧伝している流行理論によれば、ムスリムにはそうする権利があり、またその実力もあるが、それは実際には出来ない。これは悩ましいジレンマである。

ネパール国家の世俗化は、ネパール社会の宗教化をもたらした。なんとも皮肉なアイロニーである。

* R. Upadhyay, "Muslims of Nepal: Becoming an assertive minority," Oct.4, 2007, <http://www.saag.org/%5Cpapers25%5Cpaper2401.html>

*"Gunmen assassinate Muslim leader in Nepal," Islamonline.net, 2011-09-27

2011/09/28 22:22

カテゴリー: [社会](#), [宗教](#), [政治](#)

タグ: [communalism](#), [Islam](#), [世俗化](#)

イスラム協会書記長, 暗殺される

26日午後1時半頃、加徳満都で「ネパール・イスラム協会」書記長のファイザル・アフマド氏（35歳、あるいは40ないし41歳）が、バイク2人組に銃殺された。頭、首、胸など全身に十数発の銃弾を受けたとされるから、確実な殺害を意図した**白昼の暗殺**である。

暗殺現場は、加徳満都のど真ん中、トリチャンドラ校前、ラニポカリ警察署横で、いつも多数の人通りがある。アフマド書記長は、トリチャンドラ校・ラニポカリ署向かいのジャメ・マスジット(イスラム教モスク)での礼拝後、近くの事務所に戻る途中であった。

アフマド書記長は、国際イスラム大学(パキスタン)で経済学、アリガ・イスラム大学(インド)でイスラム学を学び帰国、ネパール・ムスリムの青年リーダーとして頭角を現し、「ネパール・イスラム協会」書記長となり、協会8委員会の一つ Al-Hera Association を担当、イスラム教育に尽力していた。

そのアフマド書記長が、礼拝後、殺害された。これは、常識的に見て、白昼の暗殺であり、「脅し」「見せしめ」と考えざるを得ない。



ジャメ・マスジット。左下が警察署，左上方がトリチャンドラ校（2007.3.26）。

実は、これと瓜二つの事件が、2010年2月7日にもあった。**Jamim Shah** 殺害事件である。ジャミム・シャハ氏は、メディア起業に成功し、スペースタイム・ネットワーク会長，チャンネル・ネパール会長となっていた。そのシャハ氏が2月7日昼過ぎ，車で帰宅途中，ラジンパットの仏大使館近くで，バイク2人組に銃で至近距離から頭や胸を撃たれ，死亡した。確実な殺害を狙った白昼の暗殺といわざるをえない。

ジャミム・シャハ氏は，インド筋から，ISI(パキスタン情報局)の手先と非難されていた。そのため，シャハ氏暗殺にはインドが絡んでいると噂され，事件解明が繰り返し叫ばれてきたが，今のところめどが立っていない。おそらく迷宮入りであろう。

今回のアフマド氏殺害と昨年のシャハ氏殺害は，構図が同じである。加徳満都の人通りの多い表通りで，白昼堂々と，2人組が至近距離から銃を頭や胸に向け発射する。人前で確実に射殺することを意図した政治的・宗教的暗殺であることは明白である。

しかし，ネパールでは，これを明言・公言することは**タブー**である。誰にも分かっている。しかし，それを明言すれば，大変なことになる。言えないこと，言っではいけないことなのである。

ここで危惧されるのは，民主化・自由化の別の側面である。以前であれば，タブーへの暗黙の社会的了解があった。むしろ非民主的なものだ。ところが，革命成功のおかげで，そうしたタブーが次々と解除され，見聞きしたこと，思ったこと

をそのまま語ってもよいことになってきた。キリスト教墓地問題もその一つ。革命スローガンの包摂民主主義は、アイデンティティ政治であり、それによれば誰でも自分のアイデンティティを主張してよいし、主張すべきである。もはや暗黙のタブーを恐れ、自分のアイデンティティを曖昧なままにしておく必要はなくなった。

こうした状況の下で、もし力をつけつつあるイスラム社会が、ジャミン・シャハ事件やアフマド事件を政治的・宗教的暗殺と明言し、抗議行動を始めたらどうなるか？ 悲惨、凄惨なコミューナル紛争の泥沼にはまりこむことは避けられないだろう。世俗的人民戦争の比ではない。難しい事態だ。

暗殺は昔からあったし、今もある。加徳満都は、各国秘密機関が暗躍する、現代の日本では想像も出来ないほど緊張に満ちた、危険と背中合わせの政治都市なのである。

* Nepalnews.com, Sep.26; eKantipur, Sep.26; Himalayan, Sep.26; republica, Sep.26.

谷川昌幸(C)

2011/09/27 12:24

カテゴリー: [宗教](#), [政治](#)

タグ: [アイデンティティ](#), [イスラム](#), [コミューナル紛争](#), [CIA](#), [ISI](#), [RAW](#), [包摂参加民主主義](#), [暗殺](#)

[人治の国の立ち枯れ援助信号機](#)

毎日、朝から晩まで勤勉に仕事をし、合間に街を移動。車は引き続き急増し（韓国車多し）、各地で渋滞が続発している。

この車増加を見越し（あるいは車輸出のため）、日本を始め先進資本主義国は、市内各所に最新式信号機を援助してきたが、見た限りではほぼ全滅、まともに動いているのは最近（今年?）設置したばかりの日本援助カトマンズ＝バクタプル高規格道路のものだけだった。これも、この調子では、半年もすれば消されてしまうだろう。

電気は、雨期であり、足りている。スイッチを入れれば稼働するはずなのに、切ってしまう。これはハードではなく、ソフト、つまり**文化の問題**である。

以前にも指摘したように、信号機は**法治（ルール遵守）のモデル**。機械（信号機）の合理的命令に人間が服従する。法治が内面化されている日本では、たとえタヌキしかいない深夜の農道でも赤信号で車はちゃんと停止する。日本では、法（ルール）をつくる支配階級は法を守らないが、大半の人民大衆はいつ、どこでも法を遵守する。

これに対し、ネパールは本質的に**人治の国**。周りの人々の動きを見て自分の行動を決める。文化全体がそうなっているので、道路においても、いくら高価・高級な信号機を設置しようが、それは援助国の自己満足に過ぎず、ネパール人民にとっては何の意味もない。半年もすれば、スイッチを切り、人治に戻ってしまう。

たとえば、日本援助の文部省前信号機も、ロータリー式に戻され、警官が手信号で交通整理している。ここには、怪しい「アメリカン・クラブ」があり、前回、日本援助信号機をタメル方面から激写したら、アメリカンクラブ警備兵（武装警官）がすっ飛んできて、すんでの所で射殺される場所であった。ここでは毎年、何も知らず王室博物館やタメル方面をパチリとやった日本人観光客が何人か拘束されている。いまや文部省前交差点は、ネパール文化・社会・政治のパワースポットの一つである。ぜひ見学していただきたい。ただし、写真は撮らないこと。

信号機のないロータリー式交差点は、人治のモデル。つねに相手の格や動きを見て、自分の行動を決める。そして、人治の国ネパールでは、ロータリー式や警官手信号の方が、はるかによく機能している。実に見事だ。

ネパールの人治文化は、社会に深く根付いており、近代的な法治主義や立憲政治を移植するのは、至難の業である。それは、立ち枯れの衰れをさそう日本援助信号機を見れば、誰しも納得せざるをえないだろう。



安全啓蒙(バグバザール)

トヨタと消灯信号と交通

谷川昌幸(C)

2011/09/21 14:31

カテゴリー: [社会](#), [文化](#)

タグ: [援助](#), [法治](#), [人治](#), [信号機](#)

英語帝国主義とネパール

早朝から日没後まで猛烈に仕事。その合間に、ちょっとだけ、小中学校を見学した。教科書、授業方法ともめざましく向上しているが、問題は何と言っても英語。公立も私立も競って英語教育に走り、もはや完全な英語植民地。ネパール文化を畏敬する私としては、遺憾・残念の極みであり、また日本の未来を見る思いで内心忸怩たるものがあった。

ネパールでは、幼稚園から英語漬けとなり、英語が出来ない(貧困等で英語を学べない)子供への言語差別が始まっている。以前にも指摘したように、伝統的カースト制に替わり、それよりも根深く恐ろしい言語カースト制が生まれ、強化されつつあるのだ。

英語——支配カースト

ネパール語——中層カースト

諸民族語——下層カースト

もちろん、ネパール人民が、伝統的カースト制を廃止し言語カースト制を世俗共和国の基本原則とすると定め宣言しているのなら、それはネパール人民自身の選択であり、尊重するにやぶさかではない。

しかし、現実には全く逆だ。人民戦争は、被抑圧諸民族の解放のために戦われ、革命成功により各民族語の権利が憲法に書き込まれた。各民族は、少なくとも初等教育までは**民族語で教育をする権利**、**教育を受ける権利**を有する。憲法で明文規定された法的権利義務であり、革命の大義である。それなのに、現実には、その自分で定めた目標、法的権利義務を自ら率先して無視し、英語帝国主義にひれ伏している。

ヒマラヤの山奥やタライのジャングルで、”How do you do”なんて言ってみて、何になる。丹後半島のわが村で、丹後弁を唾棄し、アメリカ幼児語の口まねをするのと同じことだ。

ネパールは、低俗権力語・英語に自ら隷従し、二、三世代もすれば、諸民族の誇り高い文化も伝統も根こそぎ失われてしまうであろう。



英語買弁企業の宣伝(バグバザール)

谷川昌幸(C)

2011/09/17 12:04

カテゴリー: [教育](#), [文化](#)

タグ: [英語帝国主義](#), [言語権](#), [母語教育](#)

マオイスト本部、突撃取材

9月13日午後、ネパール共産党毛沢東派(マオイスト)党本部への突撃ゲリラ取材を試みた。

マオイスト党本部は、市内の高台にある。リゾートホテル風の豪華な建物で、人民戦争を戦ってきたばかりの党の本部とはとても信じられない豪華さだ。玄関前にはピカピカの高級車が並び、守衛室—といっても民家3軒分はある—には、早やチャッカリの高級紳士がたむろしていた。



マオイスト党本部

相手は偉大な無産階級の党、私のような貧相プチブルー実態はともあれ、ネパールから見ればプチブルーなどまったく相手にされないかと思っていたら、とりあえず中に入れてくれた。さすが、農民・労働者の党だ。

建物内は、外見と同じく高級、家具調度は渋く、ソファはふかふか。そして、壁にはもちろん農民・労働者の英雄的戦いを描いた革命的絵画が掛けてある。退廃

ブルジョア抽象絵画ではない。



ヒマラヤの赤旗，血染めの憲法

待っていると、党幹部のM氏(元副首相)が会見に応じてくれた。お話には**極秘情報**も含まれているので、詳細は割愛。党内では左派に近いが、全体としてお話は極めて「友好平和的」「建設的」「現実的」であった。会見後、**極秘資料**をいくつかいただき、党本部を後にした。

マオイストは、いまやダントツのお金持ち政党といわれている。それは党本部ビルを見ただけでも、すぐ納得できる。10年余も、ジャングルで蚊やヒルや毒蛇に悩まされ、食うや食わずで苦しいゲリラ戦を戦ってきたのだ。ブルジョアどもが、無産人民から長年にわたり搾取してきた財産を取り戻し、貧困人民のため党本部として利用して、何が悪い。論理明快、さすがプラチャンダ議長の党だ。ますます好きになった。

マオイスト本部には、すでに外交官らしき西洋紳士が盛んに入出入りしていた。先述のように、米帝はマオイストを「テロリスト・リスト」に掲載しつつ、バタライ政権成立を祝福した。テーブルの下で足をけりつつ、笑顔で握手する。これが本物の外交だ。

たまたまであろうが、日本人は一人もみなかった。もちろん、たまたまに決まっている。日本は世界に冠たる外交大国だからだ。

谷川昌幸(C)

2011/09/16 20:35

カテゴリー: [マオイスト](#), [外交](#), [憲法](#), [政党](#), [人民戦争](#)

タグ: [憲法](#)

インドラ祭よりミスコン祭

9月11日午後、仕事帰りにインドラ祭をのぞいてみた。人出はそこそこだったが、盛り上がりには欠け、途中で退散した。

理由は通俗化。社会の資本主義化・世俗化で、祭りの「聖性」が失われ、「非日常性」が減退した。

いまでは、クマリにせよ神々にせよ、要するに見世物。非日常的聖性への怖れなど、どこにもない。報道カメラが傍若無人に神々を追いかける。儀仗兵はだらけ、まるでやる気がない。観衆も、来てはみたものの、これならテレビの方が面白いなといった感じで、しらけきっている。

もはや、インドラ祭は二流の退屈な見世物に過ぎない。非日常的聖性を失ったクマリは、到底、世俗の生き神様ミス・ネパールミス・ネパールの敵ではない。



魂を抜かれたクマリ広告



クマリ・神々を見世物にする記者たち

谷川昌幸 (C)

2011/09/12 10:42

カテゴリー: [宗教](#), [文化](#)

タグ: [インドラジャトラ](#), [ミスコン](#), [資本主義](#), [世俗化](#)

[没収財産返却、バタライ首相](#)

バタライ首相の評判は、今のところ、かなり良い。インド寄りとの懸念を除けば。

そのバタライ首相が、人民戦争中に没収した財産を3か月以内に返却すると発表した。マオイストからすれば、これまで幾度も宣言して実行できなかった難問だ。

人民戦争は、不在地主、悪徳高利貸しの打倒を目的の一つとして戦われた。貧困農民にとって、実際には耕地没収配分、借用書焚書は、革命の目に見える最大の成果であった。

たしかに不労地主、不在地主——中には「犬」地主や「牛」地主もいた——には正義はない。高利貸しにも正義はない。没収されて当然だ。「耕地を耕作者に！」こそ、革命のもっとも魅力的なスローガンであった。

それなのに、没収地を「犬」地主や「牛」地主に返すという。農民は犬や牛の小作人に逆戻りするわけだ。

「所有権の絶対」などといった資本主義のお念仏に、マオイストは屈するのか？ 帝国主義総本山アメリカですら、日本地主の土地没収を強行したではないか。わが家の没収土地を返せ！

米印は、ネパールに資本主義を押し付けた手前、「所有権の絶対」を唱えざるを得ない。米印は、地主や高利貸しの味方なのだ。

バタライ首相は、印大国主義から学んだ学識を総動員して、マルクス主義＝毛沢東主義の罰当たりな唯物論を廃棄し、「所有権絶対」信仰にマオイストを改宗させるつもりらしい。資本主義もマオイズムも信仰。どちらの神がよいか。それともヒンズーの神々や仏教の方がよいのか？

近い将来、世界を破滅させ、人類を「最後の審判」の場に引き出すのは、まず間違いなく資本主義教である。バブラム首相の米印資本主義への改宗に展望はあるのか？ 難しいところだ。



インドラチョークのバタライ首相

(c)谷川昌幸

2011/09/11 12:34

カテゴリー: [マオイスト](#), [人民戦争](#)

タグ: [Bhattarai](#), [土地改革](#), [所有権](#)

不動産バブル、まだ拡大中

加徳満都の不動産場バブルは、この20年間、少し勢いが衰えたときはあったものの、一貫して拡大してきた。

街の至る所に、豪華ビルが建設され、景気は絶好調。地価は長崎よりもはるかに高く、大阪よりも、たぶん高い。ウワサによれば、加徳満都の家を売り、ニューヨークに豪華邸宅を買ったとか。この不動産バブルは、出稼ぎ送金が続く限り破裂はしない。他に投資先が無いからだ。

しかし、問題は先述のインフレ景気に取り残された弱者。そして、バブルはいつか破裂するということ。弱者の不満爆発が先か、バブル景気の破裂が先か。難しいところに来ている。



建設中7階建てビル。足場は竹。

(c)谷川昌幸

2011/09/09 23:36

カテゴリー: [社会](#), [経済](#)

タグ: [インフレ](#), [バブル](#)

10万ルピー札束と革命再発の予兆

カトマンズのインフレは、すさまじい。10万ルピー札など、紙切れ同然。1000万ルピー札が、見る見るうちに消えていく。で、ちょっとした額のやり取りとなると、10万ルピー札束となる。

これが実物。大型ホッチキスの太針数本で、しっかり綴じてあり、ばらすことは困難。事実上、「10万ルピー札」として通用している。



だったら、いっそのこと10万ルピー札を発行したらよい。「カマ・ハンマー」印とバブラム博士肖像入り10万ルピー札。信用絶大で、日本でも通用するかもしれない。

しかし、そんなことより心配なのは、庶民。この物価高のもとで、どのようにして生活しているのだろうか？

政権党マオイストは、ぴかぴか外車だらけ、はや利権の巣窟とか。もはやマオイスト体制派には期待できそうにない。となると、バイダ派か他の急進派が党を割り、窮乏化プロレタリアートのため再び武器を取るのを避けられそうにない。

革命は、インフレに懐胎し、銃口から生まれる。10万ルピー札束は、革命闘争再発の予兆のように思われてならない。

(C)谷川昌幸

2011/09/08 19:15

カテゴリー: [社会](#), [経済](#)

タグ: [インフレ](#), [革命](#)

[カトマンズを加徳満都に](#)

昨日、1年ぶりにネパールに来た。キャセイ＝ドラゴン便だが、快適そのもの、隔世の感がする。

1. 旅慣れたネパール人・中国人

最大の驚きは、ネパール人、中国人など大半の乗客が小さな手荷物しか持ち込まないこと。ほとんど手ぶらの乗客も少なくない。以前だと、めいめいが大きな荷物を機内に持ち込み、収納スペースの分捕り合戦となったのだが、それも今は昔、いまでは皆が整然と乗り込み、定刻通りの出発となる。ネパール人も中国人も豊かになり、旅慣れてきたのだ。

その一方、昔とあまり変わらないのが、われら日本人。預けきれない重量超過荷物をリュックに詰め、機内に持ち込む。わがリュックも15Kg位はあった。貧乏くさく、みじめ。日本の没落を身を以て機内で披露した次第。

2. カトマンズから加徳満都へ

経済的にだけでなく文化的にも、日本の没落は明白。中国系航空会社の乗り入れ増加につれ、カトマンズは「加徳満都」になりつつある。そして、腹が立つのは、「カトマンズ」よりも「加徳満都」の方が断然文化的なこと。「パリ」よりも「巴里」、「ロンドン」よりも「倫敦」と同じこと。

以前なら、明治以降、そうした文化的な命名は、日本人が率先して行ってきた。ところが、日本はいまや英語帝国主義に屈服し、言語植民地に転落しつつある。そして、その日本に代わって、本家中国が漢字文化拡大の先兵となり始めたのだ。やはり中国にはかなわない。

どうみても、「加徳満都」の方が「カトマンズ」や「カトマンドゥ」よりも文化的に高尚だ。中国の後塵を拝すことになるが、日本も「加徳満都」に切り替えるべきではないだろうか。

2011/09/06 18:08

カテゴリー: [ネパール](#), [文化](#)

タグ: [英語帝国主義](#), [漢字](#)

武器引き渡しは「自殺行為」、バイダ派

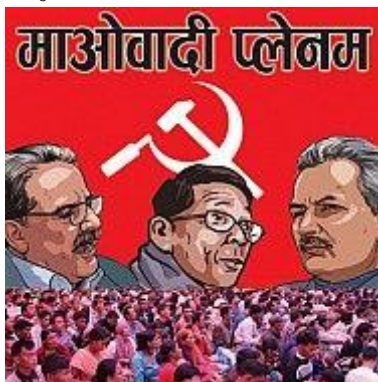
1. 武器庫鍵引き渡し

9月1日、マオイストは常任委員会決定に基づき、武器保管庫の鍵を「軍統合特別委員会」に引き渡すことにし、各 PLA 宿营地 (Cantonment) では、武器の点検確認後、鍵が特別委員会側(国軍、警察、武装警察、PLA 各 2 名、計 8 名)に渡された。(7 宿营地で実施。ロールパ方面部隊などは未完。)

2. プラチャンダ派とバイダ派の衝突

これに対し、モハン・バイダ (キラン) 副議長は声明を出し、「これは自殺的だ」と非難した。そして、9月2日、全国チャッカ・ジャムを実施し、今後、松明行進など、反対運動をさらに拡大していくと宣言した。すでに、カブレ・パンチカールではプラチャンダ派とバイダ派が衝突し負傷者が出た。

この動きを見て、プラチャンダ議長は9月2日付けで声明を出し、鍵引き渡しの正当性を強調し、キラン同志の言動に対し「憂慮」を表明、党の公式決定を一致団結して支持するよう要請した。党公式文書による真正面からのバイダ派非難である。



3. 実力闘争再開か？

人民解放軍 (PLA)は、いうまでもなくマオイストの中核だ。そして、軍の生命線は武器にある。その武器を、PLA 国軍統合も決まらないのに政府に引き渡すのは、人民戦争を戦ってきた人々にとっては、たしかに「自殺行為」と見えるだろう。バイダ副議長の怒りはよく分かる。



しかし、マオイストはいまや政府与党だ。プラチャンダ議長が、首相としてのバタライ副議長（軍統合特別委員会委員長）に武器庫の鍵を引き渡したにすぎない。

それでも、バイダ派からは、それは革命への裏切りと見える。武器庫鍵の引き渡しには、さっそく米駐ネ大使が歓迎を表明した。プラチャンダ=バタライ派が米印と手を組み革命をつぶしにかかっている、と急進派は見るわけだ。

ネパールの市場社会化は、目もくらむ格差をもたらしている。この状況では、バイダ派支持はむしろ拡大していく。そして、それをバネにマオイスト左派が分離し、再び実力闘争を始める可能性は十分にある。予断を許さない状況だ。

* ekantipur, Sep2; Nepalnewscom, Sep2; Republica, Sep3

谷川昌幸(C)

2011/09/03 13:55

カテゴリー: [マオイスト](#), [平和](#), [人民戦争](#)

タグ: [Baidhya](#), [Bhattarai](#), [Prachanda](#), [平和構築](#), [人民解放軍](#)

[「テロリスト」首相に祝意表明, リアリスト米国の凄さ](#)

ネパール・マオイストは、米国にとって「対テロ戦争」のターゲットの一つであったし、2004年にはカトマンズの「アメリカン・センター」が爆破されてもいる。現在もなお、マオイストは「世界テロリスト・リスト」に掲載され、ばりばりの現役テロリストである。米国にとっては。

しかし、それはそれ。リアリスト米国は、テロリスト政党 No.2 が首相に選出されると、スコット・デリシ駐ネパール大使にいち早くバタライ氏を訪問させ、首相当選を祝わせた。また、国務省の V.ヌランド報道官も、マオイスト副議長の首相当選を祝い、米ネ関係の更なる発展への期待を表明した。

米国国章は、ワシが両足で矢とオリーブを握っているデザイン。別の解釈もあるが、一番分かりやすいのは、戦争か平和か。エゲツナイ、露骨ともいえるが、こうあからさまに開き直られると、すっきりし、スガスガしくもある。共産主義テロリストとだって、国益にかなうなら、いつでも取引しますよ、ということ。



このようなドライなリアリズムが、ウェットな日本外交には欠けている。2009年2月、バタライ氏が蔵相として来日したとき、歓迎の席でマジで「マオイストは嫌いだ」とのたまった御仁がいたそう。そんなことを言って何になるのだろうか。米国務省で外交初歩研修を受けるべきではないだろうか。

* ekantipur & Republica, Aug31.

谷川昌幸(C)

2011/09/02 12:18

カテゴリー: [マオイスト](#), [外交](#)

タグ: [アメリカ外交](#), [Bhattarai](#), [realism](#)